

第20回区民車座集会意見交換内容

※読みやすさ等のため、文意を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

- 1 開催日時 平成28年2月17日（水） 午前10時40分から正午
- 2 場 所 中原中学校 A棟2階 視聴覚室
- 3 参加者等 「中原区子育てサロン」「ママカフェ」「パパママパーク」「おいでおいでルーム」「レインボーリング」の皆様、傍聴者 合計22名

（1）市長挨拶

こんにちは。お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。もう20回になりますが、就任以来毎月1回各区を回って区民車座集会をやらせていただいています。2巡目までは定員30名で、「テーマを決めずどなたでも来てください」という形でやらせていただきましたが、3巡目からは各区によって少しやり方を変えてみようということで、それぞれの区によって特色がありますから、麻生区の際は自治会町内会の人に来ていただいたり、今日のように中原区は子育てというようにテーマを決めてやらせていただいています。

今回のように、本当に「車座」になってやるのはおそらく初めてではないでしょうか、大変良い雰囲気の中でできるなと思ってすごく楽しみにしています。川崎市はまだ人口が伸びておりまして、去年は京都市を抜いて全国で7番目に大きい都市になりました。去年1年間でも大体1万2千人ほど人口が伸びています。そのうちの75パーセントが20代という、全国でも類を見ないところですよ。特にこの中原区は、3月、4月の転入転出の時は3時間待ちとか、工夫してやってもお待たせするほど転入の方が多いということで、嬉しい悲鳴、といったところです。

子育て世代が多い街ですが、昔のように、或いはちょっと田舎の所と違って、自分のお父さんお母さんがいないという家庭が多いものですから、こうやって地域の中で子育て関係で活躍いただいている方の活動はものすごくありがたいことだと思っています。

今日はその現場の話をみなさんと意見交換できたらと思っています。どうぞよろしく願います。

（2）意見交換

中原区子育てサロン（青木さん）：中原区子育て支援推進実行委員長の青木です。中原区の子育てサロンの会並びに私が担当している丸子地区の特色である「命の授業」についてお話しします。

まず、中原区の子育てサロンの取組についてですが、平成12年から14年にかけて当時、核家族化の進行とともに子育て中の親に、育児不安、育児困難から児童虐待、育児放棄が急増して、社会問題となっている背景がありました。これを解消するために行政との協働事業として、おおむね平成15年に子育てサロンを立ち上げて取り組みました。現在、

中原区内には16か所の子育てサロンと4か所の自主サロンがあり、それぞれ盛況です。子育てサロンで、児童虐待等を防止する方法として、3点を考えています。一つ目は、母親のストレスを無くして、子供に愛情を注いでもらうという事です。具体的には、一つは若い母親の親に相当するスタッフ、ボランティアとの世代間交流、二つ目はお母さんたちの友達作りです。核家族でおじいちゃんおばあちゃんがいませんので、その場に来ると落ち着いてストレスが解消され子供に愛情が注がれる。これが一番大切なことです。三つ目は、三つ子の魂百までという諺にあるように赤ちゃんの時の育て方が大事です。育児指導として、行政の保健師さんと地域の私どもが育児のお手伝いをしています。これらがしっかりとできれば、性格の良い好青年が誕生すると言えるわけです。中原区の子育てサロンの実施状況は、配布資料の通りです。

次に、丸子地区の特色である、小学校での子育てサロン、交流会、総合学習「命の授業」についてご報告します。丸子地区には2校の小学校があり、今までに上丸子小学校は9回、西丸子小学校は5回開催しました。この「命の授業」は、児童が赤ちゃんや若いお母さんと触れ合うこと、特に赤ちゃんを抱っこすることで、その温もりを自分とだぶらせて命の大切さと尊さを心と体で感じるのです。それによって非行、犯罪がなくなるのです。資料に感想文がついていますが、児童は一様に感動しています。校長のコメントも、サロンの当日の子供たちは表情が全然違って、優しく輝いていると表現されています。これらの結果、学校と保護者の協力があり、保護司会からは、丸子は中原区の良いモデル地区になっていて、上丸子小学校、西丸子小学校及び中原中学校では悪い子供はいませんと言われました。以前あったゲームセンターも、子供が行きませんからなくなりました。本当に嬉しいことです。区の保健師さんが事前準備を万全にしますので赤ちゃんを落とすなどの事故は一度もありません。他の小学校でも実施してくれることを願っています。

次に、課題についてですが、乳幼児の育児放棄、虐待の防止と、小中学生の健全育成の2点です。一つは子育てサロンへの参加親子の増員です。具体的にはサロンに来られない親子をいかにして導くか、という事です。現在、赤ちゃん訪問には、行政が行う新生児訪問と我々が行っている「こんにちは赤ちゃん訪問」の二つがありますが、90パーセントが新生児訪問を選んでいきます。新生児訪問の際に、保健師さんのほうから地域の子育てサロンに行くように勧めていただいているのですが、これがなかなか実現しないようです。そこで終わってしまうので、お母さんのストレスが溜まり、育児放棄や事故が起こってしまうわけです。ぜひ、地域包括ケアシステムの中で、子育てサロンに参加することを正として取り組んでいただきたいと思えます。ちなみに昨年3月にサロンをやり、卒業する10組の親子に感想を聞きましたら10人揃って、友達ができたことが嬉しい、と言っていました。二つ目は小学校の総合学習「命の授業」の拡大です。

最後に、私の感想ですが、丸子地区の子育てサロンに携わって13年になりますが、いろいろ素晴らしいスタッフに恵まれて、効果も良く、本当に良かったと思っています。また、区役所のこども支援室、児童家庭課には行政との協働事業ということで御指導、御支援をいただきましてありがとうございます。特に区長さんには小学校でのサロンに参加していただき、赤ちゃんを抱っこしていただいたことは印象に残っています。今後もいい環境を維持したいと思っていますので、微力を尽くしていきたいと思っています。

市長：ありがとうございました。この会が始まる前に、サロンの始まりのところだけ20分ほど見せていただきましたが、初めて参加したという方が非常に多い中でも、一瞬であらゆる中で安心感が生まれるんでしょうね。そういったことを感じる事ができて、とてもいい活動だと思いました。「命の授業」の直筆の感想文が貼ってあったので、読ませていただきましたが、どれも素直な感激がありますよね。自分もそうやって親に育てられたんだという事と、次に自分たちが守ってあげなくてはいけない存在がいるという連続性が感覚的にわかるという事が、教えられてではなくて自分が体験する、触ってみるという五感で感じる事によって全然違うんだということがあの感想文で読み取ることができて素晴らしい展開だと思いました。

これは丸子地区だけの取組ですか。他の所でやっていない理由があるのですか。

青木さん：校長先生次第です。始まりは平成18年に上丸子小学校の校長先生に「移動サロン」ができませんか、地域でやっているのを学校でできないかと言われたことからです。そこで私たち丸子の関係者で始めました。赤ちゃんを抱っこすることは本当に神秘的なことで、小学生の心を動かし綺麗にしちゃう、人をいじめたり殴ったりという気持ちがなくなっちゃう、ということらしいです。私は区社協の会長もやっていますので、賀詞交歓会や総会などでこのことを言っていますので最近わかってくれる地区も出てきましたが、校長先生を説得しなくてはいけないんです。

市長：そうでしたか。今日少し見せていただいただけでも、素晴らしい取組だと思うので、ぜひ「命の授業」は教育長を誘って視察させていただいて、その際には校長先生も誘い合わせてお邪魔したいと思います。ぜひよろしくお願いします。

ママカフェ（松本さん）：小杉御殿町に33年住む松本と申します。平成15年に中原区全域で子育てサロンを立ち上げた実行委員のメンバーで、今日見学していただいた、子育てサロン「こすぎ」と「とどろき」を担当しています。平成21年から再開発地域の子育て支援事業「パパママパークこすぎ」にも関わらせていただき、市民ミュージアムで区内最初にオープンしたママカフェにも関わっているということが、この「ママカフェいまい」の発端になっています。

平成24年9月にスーモが会議室を地域に開放したいという話が区役所を通じてあったときに、ちょうどその地域、今井上町に子育てサロンがなかったので、それもいいと思ったのですが、ママカフェでコーヒーとケーキをいただくお母さんたちの幸せそうな顔の印象が強かったので、是非ママカフェをということをお願いしました。私はそれまで市民ミュージアムのボランティアで学んだノウハウを生かしながら、ボランティアの確保や、必要な物品、飲食コーナーの担当、保険、広報はどうするかなど、何度も打合せしながら、スーモの住宅展示場の会議室にママカフェができました。今日の資料の中に活動の様子が入っています。初回は来ていただけるかドキドキしましたが、12組の親子に参加いただき、すごくホッとした記憶があります。スタッフは私の個人的なネットワークを使いまし

て、地域の民生委員児童委員さんや社会福祉協議会委員、それから近隣小学校のPTA役員さんに持ち回りでやっていただきました。それというのも、そこに来るお子さんはいずれは近隣の小学校に通うことになりますので、是非関係を作ってもらいたいという思いからです。現在まで34回開催して、年間100人以上の参加があります。

取組の内容ですが、まず区役所から荷物を運ぶ際は、男性ボランティアが自家用車を出してくれて荷物を運んでいます。次に2階まで荷物を運びますが重労働です。会議室をサロン会場にするため、机と椅子を移動してマットを敷き、飲食コーナーも作りますが、スタッフは3～4名で行うのでハードな作業が続きます。マットやテーブル、全てのおもちゃは除菌しています。カフェの準備は社会福祉法人しいの実会さんが行っています。しいの実会さんは障害を持ったお子さんたちが自分たちでシフォンケーキを作って美味しいコーヒーを入れていますので、飲食に関してはそちらにすべてお任せしています。開始の時は男性スタッフが外でベビーカーを預かり荷物を入れる袋と番号札を渡しています。このスタッフも地域の「おじちゃん」二人なんですけど、初めて来る親子さんには思い切り笑顔で接してくださいとお願いしているので、初めてのお母さんにもとてもいい印象を持っていただいています。見守りスタッフの役割としては、親子との適切な距離感、地域のホットな情報の提供、子育て経験者としての優しさ、それと、時間を気にしない方が良いと思ひ、最初はタイムスケジュールがなかったのですが、やはり自己紹介の方が良いという参加者の意見で、今は自己紹介タイムを設けています。それから、行政からの情報案内、しいの実会さんの自己紹介もしています。地域には色々な方々がいるということを知っていただく機会としています。参加しているのはほとんどが育休中のお母さんたちですので、子育てには地域の方やたくさんの方の力が必要だということをおわかっていただけるようになるべく親子と会話するようにしています。参加者にもこのサロンを一緒に作っているという意識を持っていただくように、子供はお母さんがしっかり見ていてくださいという注意書きをしています。カフェはセルフサービスですし、終了時のおもちゃの片付けも除菌シートを使ってみんなで作業します。

課題としては、先着15名なので、鍵が開く前から並んでいるお母さんたちがいて、冬場は寒くて心配なので工夫が必要かなと思っています。また、月齢の低い乳児が多いので動き回る幼児にはちょっと手狭に感じられるかと思ひます。また、育児相談への対応が十分できないことがあります。保健師や保育士がいないので私たち素人がやっているので、行政に繋ぐという役割をしっかりやっていきたいと思っています。また、スタッフが私の身内ですので、地域や学校の行事と重なった場合は、人が足らず、区役所に応援をお願いしていますが、ボランティアの育成という点では、現在はボランティアに対する考え方も多様化していて、1か月に1回お手伝いすればいいや、みたいな感覚なので、なかなかリーダーになって頑張ろうという人がいないといった課題もあります。

市長：さきほど子育てサロンにいらっしゃったので、サロンの方かと思ったら、ママカフェもやっていただいていたんですね。ありがとうございます。さきほど青木さんの話にもありましたが、私たち行政も困っているのは、本当に情報を届けたい、出てきてほしい方にどうやって情報を届けるか、出てきてもらえるか、というのはむずかしいのですが、こ

ういった「気軽にお茶を飲みましょう」と言うスタイルで入っていくというのも非常にいい入り方ですね。きっかけは何でもいいので、時間とか意識とかを共有するというのが大事だし、私たちもやりたいと思っていることをやっていたらいいことに感謝したいと思います。ところでスーモの住宅展示場が貸してもらえらる経緯はどうだったのでしょうか。

松本さん：これは多分、企業の地域連携ということで、若い人たちに住宅展示場を見てほしいという思いもあると思いますが、私は区役所から声を掛けられて、使い方を話し合っただけなので…。

市長：すごくいい連携だと思って。川崎は、集まれる施設という点が弱いので、民間の施設をお借りできるのは大事なことです。こういう形があることに少しびっくりしましたが、住宅展示場としてもいいでしょうし、住民にとってもいいことですし、ウィンウィンの形になっているのは素晴らしいと思います。

パパママパーク（芳賀さん）：NPO法人小杉駅周辺エリアマネジメントの芳賀です。平成19年4月にNPO法人が立ち上がったのですが、パパママパークはそれから1年半後の20年9月から実働開始しています。半年ぐらい色々検討期間があり、住民が落ち着いた段階でサービスを開始しました。今まで通算350回くらい開催しています。参加者7,000組くらいです。数字的には皆さんのサロンとは違い非常に多い。毎月4回開催しているので非常に多忙です。一番困っているのは最後にも申し上げますがスタッフの確保です。立ち上げの際は、松本さんにもいろいろお世話になったのですが、子育て支援団体「にじの会」から全面的に支援いただき、現在もスタッフを出していただいています。

活動にあたっては、漫然とではなく、活動の理念を持って、みんなの思いを一致させてお子さんに接しようということで、3つの柱を持っています。保護者同士の交流の促進、パパママがホッとする、子供たちが安心して集まれる場所にする、子育ての関連情報の提供です。自分の所に事務室がありますので、それなりのスペースはありますが、事務室のまま使えませんが、その都度準備と後片付けに非常に手間がかかっています。4回開催のうち、第2水曜日は“はいはいあんだよ”、第3水曜日はもう少し小さい赤ちゃん、と対象を分けています。理由は、集まる方が多いので、安全確保のためもあったのですが、思いが同じ月齢の人たちが集まるので非常に良かったと思っています。また、母親の要望で「親子パーク」という別の形で運営しているものを金曜日にやっています。それはフリーでどなたでも来て遊んでください、というものです。いずれにしても、いろいろ情報を提供するためにプログラムを用意しており、区役所から保健師さんや栄養士さんも派遣していただいています。また、リトミックや歌遊び、季節ごとの行事なども取り入れています。

今20名程のスタッフで運営していますが、なかなかシフトが難しく、2～3年前からは行政から助成金をいただいて、現在スタッフを確保していますが、今後助成金がなくなってしまうと苦しい経営になるかなというのが今一番の悩みです。

市長：ありがとうございます。非常に回数も多くてすごいなと思っています。特にエリア

マネジメントの皆さんは子育てのほかに、地域の清掃活動とかいろいろなことをやっておられて、高層マンションの新しい方たちをうまくまとめていらっしゃるという印象を持っているのですが、こんなにたくさんやっいらっしゃるといのは初めて知りました。

芳賀さん：自然にそうなったんです。我々としては週1回ぐらいという気持ちだったんですが。

市長：これは特に広報とかしていないんですか。

芳賀さん：一応、エリアマネジメントのホームページからパパママパークの情報は出しています。それから結構マスコミが来ます。先週も朝日紙が来て、29日に放映されるそうです。

市長：素晴らしいですね。保健師だとかは定期的に来るのですか。

芳賀さん：年度当初に打合せして日程を決めています。昨年度は3回来ていただきました。もっと来ていただきたいというのがありますが、非常にお母さんたちに喜んでいただいています。やはり保健所に行くというのは気分的に大変みたいで、それが住んでいる下に降りてくればいいわけですから。これからもお願いしたいと思っています。

おいでおいでルーム（伊東さん）：始めたきっかけですが、私は公立保育園の保育士として30何年仕事をする傍ら、ボランティアとして学習障害の子供たちをずっと見てきて、何か地域に根差したことができないかということで、たどり着いたのがおいでおいでルームという未就園児の事業でした。幼稚園、保育園に行くと育ちの悪い子供たちはどこかで救ってもらえるんですが、生まれたての1か月くらいから年少さんに上がるまでの子供たちは希望のないお子さんが結構いました。現役の時から勉強会やボランティアをして長い間子供たちを見てきた中で、本当に今の子供たちは凸凹を持った子供たちで、要するにノーマルに育てている子供たちは一握りしかいない、でもそれが当たり前ということで、ルームの中では日常茶飯事いるわけですが。22年23年は神奈川県、それと川崎市の空き店舗活用支援事業の補助金をいただいて、それと活動センターの補助金をいただいて3年4年続けて、今9年目です。この3年間は自分たちの足で事業運営をしていて、少しの赤字ですがどうにか事業として成り立っています。スタッフとしては9年間連れ添った人たち、高齢者がいたりしますが、ローテーション、人手不足はどこのサロンでも同じだと思います。それを盾にしては前に進めませんので、どうにか皆さんに苦勞かけながら9年目に入り地域の中で根ざしていると思います。

母親の7割が孤立しています。身近なところで何ができるのかということ、やはり寄り添って一緒に遊んで、一緒に食べて、一緒に泣いて、一緒に笑う、そういった日常できることが求められていることです。ルームの中でそれぞれの分野を活かしながら、年間で、昨日までに3,180回、毎日平均10組の親子とスタッフ数名が右往左往しながら、地域

の公園に出たり、離乳食を食べたり、お昼寝したり、泣いているお母さんがいれば寄り添ったり、毎日忙しい中で過ごしています。ほとんどが午前中の利用で、午後の利用は午前中の半数ぐらいですが、その分ゆっくり話を聴いたり関わることができます。

運営の状態ですが、どうにか収支が成り立っていますが、空き店舗を借りているので毎月の家賃が発生しています。スタッフは交通費ぐらいしか出していないのですが、それでもなかなか難しい運営です。それにもめげず、皆さんの協力と地域の協力、大家さんの協力があったり寄付のボランティアがあったりして、どうにか運営を任されている状態です。今後は、子育てのママたちにもう少し元気に、そして何があっても自立ができるような事業運営を、いつまでできるかわかりませんが、前に進めていきたいと思っています。

市長：ありがとうございます。資料を拝見しましたら、平日全部やっているんですね。これはすごいことです。利用料金が安いと思うんですが、やはりこれぐらいでやりたいという思いからですか。

伊東さん：最初は300円だったんです。最近500円に上げていただいて。それでも家賃と経費を差し引くとトントンです。それでも子供たちの笑顔とママの悩んだ顔を見る限りは前に進まなくてはいけないと思っています。

市長：ちょっと言葉が出ないくらい、すごいと思っています。ありがたいですね。写真見ますと、短い時間で出来るお惣菜教室とか、親御さんたちも忙しい中でノウハウを教えてもらえるのもありがたいことでしょうね。スタッフは今何人いるんですか。

伊東さん：交通費程度ですが有償で4人、無償で2人、あと発達障害の大人もボランティアとして来てもらっています。あと高齢者もいます。

市長：ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

レインボーリング（茅さん）：きっかけは中原市民館で2、3歳児の親御さん向けの保育付きの連続講座を受けたメンバーたちが、この時期にこういう場が本当に必要だよ、と実感して、企画グループを立ち上げたのが6年前になります。以来、市民館の市民自主学級という形で3年間、そのあと中原区市民提案型事業として区役所を会場にして3年間、保育付きの長期の連続講座を企画運営してまいりました。

今まで御紹介いただいたように、子育て中の親御さん同士がホッコリできる場所は充実していると思いますが、そのホッコリできる時期を過ぎた2、3歳児は結構悩み多き時期、イヤイヤ期なので本当は可愛い時期なのに悩みが多い時期です。でも意外とその時期に、じっくりサポートしてもらえる場所がないということで、その時期に必要なだよ、と実感したところからです。親子イベントなどのように、ただ楽しく終わるのではなく、本当の意味で子育ての悩みを本音で話せたり、共感して客観的に自分を見られたり、気持ちにゆとりを持てる場所とか、講座が終わっても地域の中で助け合って子育てしていける絆を作る

ために、こういった連続講座を約3か月間にわたって、原則週1回、お子さんを保育に預けて、じっくり2時間学びます。講座を受けた方は同じ年頃を持つ仲間であるとか、少し先輩ママである私たち講座スタッフであるとか、地域で何十年も保育をされているにじの会のスタッフに触れることによって、一人で子育てしなくていいんだと実感してもらえるプログラムになるようにしています。毎年、受講者がスタッフとして残るスタイルでここまでできています。

活動の課題としては、中原区は新築高層マンションに住んでいる方、他の地域から転入してきた方が本当に多くて、周りに知り合いやサポートしてもらえる身内がない、という方が多くて、回を重ねていくと悩みがぼろぼろ出てきます。一日中子供としか話さなかったとか、すごく感情があふれてきます。やはりこの時期は特に丁寧にサポートする必要があるなど、実際に接してみても危機感を持っています。働いているお母さんも多いのですが、まず私たちは、一日中2、3歳児と共に過ごす親御さんのためにあり続けたい企画だと思っています。私たちは1年ごとに事業を提案していく形で、継続は3年と決まっていますので、今後どう継続していくかが課題ですが、私たちが提案しなくても、もう少し2、3歳児の時期に丁寧にサポートしていただける場が必要ではないかと感じています。

市長：ありがとうございます。私も3人子供がいて、2歳のころのイヤイヤ時期は、一人目の時は妻もそうでしたが、これはどうなっているのか、自分が悪いのかと思ったりしたのですが、そんな時に、新生児の時の仲間がずっと続いていて、そこで悩みを共有できたりして、こういう感じだよと言われて意外と助かったというのがあります。確かに、2、3歳児、「言われてみればそうだよね」と思いました。これだけ集中してプログラムをやるのはとても充実していると思います。すごく大切ですし行政もやっつけていかなければならない話なので、今後どうしたら一緒にやっつけていけるかを考えていきたいと思っています。

<自由意見交換>

市長：まだ、付け足したいこととか、他の団体に聞いてみたいことなどありますか。

芳賀さん：最初は地域のボランティアだけで始めたんですが、最近は我々の活動に賛同していただけるマンションの方の参加が増えていて現在は3名います。でも今後はもっとできるだけマンションの方で運営していただければと思っています。エリアマネジメントは色々な事業をしていて、経費も掛かりますので、行政の助成金は非常にありがたいので、今後もよろしくお願いします。また、これだけの回数をこなしていますが一番自慢できることは、事件や事故がないことです。

青木さん：命の授業についてですが、上丸子小学校は延9回やりまして、6年生の年間スケジュールは、まず6月に地域の親子35～40組くらいでやります。11月ごろ、日光の修学旅行の際、学校であらかじめ親からの手紙を預かっておいて、宿舎で子供たちに渡して読ませます。1月は地域のサロンに子供に来てもらいます。その時は6月に2か月の

赤ちゃんだったのが1月には9か月の赤ちゃんになっているので、成長の速さを実感してもらいます。2月は学校で旅立ちの会をやります。7歳から12歳までの6年間を子供たちが劇にして見せます。6年生の母親はほとんど出席しているのですが、終わると子供から親にプレゼントを渡します。それだけやると、いじめとか非行はなくなります。中原中学校もいい子ばかりです。学校と地域と保護者が一体となって子供の健全育成をすることが大事だと思います。

市長：さきほど青木さんがおっしゃったように、地域包括ケアシステムの中に組み込んでいくことが大事ですね。新生児訪問をした後にどこかに繋がっていることが大事で、どこにも繋がっていないのがいちばん怖い。これまでも、これからも課題だと思います。地域包括ケアシステムの中で、どうやって切れ目なくやっていくのかがすごく大事だと思います。残念ながら虐待の発生件数も増えている、それは残念なことです。特に0歳児に多いのは問題です。知らない、相談もできないということが原因になるんじゃないかなと思います。

先日もテレビを見ていたら、夜泣きする原因はお母さんのお腹で栄養をもらうときにお母さんの体力を奪わないように夜摂っていて、その延長で夜型になっているから夜泣きすると言っていて、びっくりしたんですが、そんなことを知ったことで安心するというのがあるので、誰かが教えてあげられれば、虐待は防げるのかなと思います。今日お集まりの皆さんは、色々な月齢を対象にしていますが、やはりみんなが、どの月齢・年齢でもいいのでどこかに関わっているという、そういう地域環境を作り出していかななくてはいけないと思います。でも、これだけプレーヤーがいるというのは心強いと思います。

さきほどから度々名前が出てくる「にじの会」さんというのはどういう団体ですか。

にじの会（傍聴）：保育ボランティアグループです。市民館で保育付の講座を作らないかということから、保育者の養成を市民館でやりまして、そこから発足し30年以上になります。あちこちに顔を出していて、メンバーは今11名がフル活動しています。

市長：フル活動！ありがとうございます。中原区内であれば、サークル活動だとか団体と連携しているんですか。

にじの会：区内というより市内全域です。消費者行政センター、サンピアンかわさき、てくのかわさき、などの会場を利用して保育付の講座をやる時に声をかけていただいて、謝礼をいただいて保育をしています。また、パパママパークとかママカフェとかの時はボランティアで子育て支援しています。

区長：区役所でも御世話になっていて、色々な会合とか区役所コンサートの時、お母さんたち楽しんでいただけるように保育していただいている、十数年前からずっとお世話になっています。

伊東さん：2月8日に予算を新聞で拝見し、子育てに手厚くしていただいていると思いました。今回車座に出席するに当たり、ママたちにアンケートを取りましたら、やはり、子育て支援をとという意見が多かった。ママたち一人一人が元気になってもらわなければいけないと思います。これからはサロンなど区に一つくらい、退職した職員が大勢いるので使えないのかと、何かきっかけになればと思います。これからも支援をお願いします。

市長：強制はできませんが、退職した職員が色々な形で協力していただいていることも多いと思います。受け皿づくりができないかなと思いますのでしっかり検討していきたいと思います。

小池さん：子育てサロンをやらせていただいています。残念なのは、サロンにも出てこれない、どこにも行けないという方がいらっしゃいます。中原区の場合3か月健診には90パーセント以上が参加する、そのときに見逃さないでほしい。その時に伊東さんがおっしゃったようにベテランの保育士さんや保健師さんだった方が、しっかりと親子を見逃さないで、ずっとケアしていけば虐待は減るのではないかと考えています。保健所の健診は、人数が増えたためにすごく時間がかかって大変とおっしゃいます。けれど、大変なのはやっている方で、お母さんたちはみんな一人なんです。その中で見逃されないようにするためには、役所は何年かすると職員が変わりますよね。人が変わるとまた1歩から始めなくちゃいけない。ベテランの方がいてくださるだけで違うと思います。サロンでやっている、このお母さんとお子さんがちょっと、というのが私達でもわかります。ですから、ベテランの方なら見逃さないと思うんです。虐待が出てこないうちにケアできるんじゃないかと。そこが歯がゆくて。私たちは何もできない、受け身です。参加してくださる方しか見られない。どこにも出ていかれないという方には情報も入っていないので、とても不安だと思いますし、健診のときに見逃さないで頂けたらすばらしいのに、といつも思っています。

市長：法定健診は3回ですよ。今までは全て保健所に集まっていたのですが、これから変わります。全員が一気に集まるということが利便性のことなど色々あったんですね。ただ、3か月健診(※)の時には、全員集まって一回見てもらう、その時に、新生児訪問した人が来ないということがあれば、一つのスクリーニングができる。それをちゃんとやるために保健所でやりましょうと、そこは見逃さないようにするためというのは、むしろ保健師さんたちが是非そうしたいという強い意思もあって、そういう思いで取り組んでいます。

※3か月健診→1歳6か月健診の誤りです。

松本さん：地域包括の話が出ましたが、サロンを初めて13年ですが、地域を繋ぐためには、我々が積極的に顔を出して、言っていないとなかなか浸透していかないと思います。また逆に、サロンに来ていたお子さんが成長して、今手伝いに来ているという繋がりも地域ならではのメリットだと思います。パパママパークのようにタワーマンションの場合は、近所付き

合いもないし、子育ては自分たちでやりたいという人も多くて無理をしている場合もあると思います。紙やインターネットの情報だけではなくて、直接会って声で伝えることが大切だと思います。

市長：是非いろいろなところに顔を出して声に出して行ってください。ご協力をお願いしたいと思います。昨年、麻生区で子育てアプリを富士通と開発して、スマホのアプリで自分の子供の情報を入れると、必要な情報が送られてくる、というようなのですが、それをモニターにやっていただいたところ、すごく良かったという反応をいただきました。川崎アプリというものなのですが、防災と子育ての分野でまず始めようということでこれから全市展開していきます。私たちの悩みって必要な人に必要な情報がいかないことです。このアプリは、ピンポイントで情報を提供することができます。最終的には松本さんがおっしゃるように、フェイス to フェイス、人と人とが関わってこそというところに繋げていくことだと思いますが、今はこんな工夫にも取り組んでいます。やはり、どことも繋がっていないというところにどう繋げていくかということを私たちも全力で頑張りたいと思いますし、皆さんの力をこれからも貸していただきたいと思っています。

<まとめ>

市長：これだけ子育て世代の親御さんたちが川崎に住もうと、意思を持って来ていただいていることはとてもありがたいことだと思います。でも、やはり都市部ですから、地域の繋がりが無いということに、私たちはどうやって寄り添っていく環境を作るかということが、地方にはない難しさだと思います。先ほど申し上げたような技術的な手法もあると思いますが最終的には人と人がどう関わっていくかという事だと思います。ですから、皆さん、今まで関わっていない人たちにどう伝えていくかということを私たちもやっていきますので、ぜひ力を貸してもらいたいと思います。

あともう一つ、伊東さんのところ、わずかな料金を取っておられますが、私は、サービスには必ず対価が発生しているということを知ってもらうのは必要だと思います。今、待機児童の解消のために保育所をたくさん造っていますが、例えば0歳児一人あたりに200万くらいかかるんですが、利用されている方はあまり御存じない。でもそれを知らないと感じがずれておかしなことになってしまうのではないかと、それを伝えないといけないのではないかと考えています。

とにかく目的は、この地域で子供を産んで、育てて良かったと思ってもらえる環境をどうやって作り出すかという事なので、そこに向かってみんなで力を合わせていきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。